8/5（木）
2010年（平成22年）
新潟日報
題字 會津 八一
夕刊
発行所 新潟日報社
本社 〒950-1189 新潟市西区善久772-2
第24309号

晴雨計

大阪、東京そして新潟へ

「仕事なくて困っている人が多いなか、頼まれもしないのに自分から辞めるなんて…」。当時の上司にそんなふうに言われながら、私は会社員生活にピリオドを打った。10年前のことだ。

現在はNPO代表として、湯沢町で冬は障がい者専門スキースクール、春から秋は障がいのある人も参加できる湯沢アウトドアセンターを運営している。

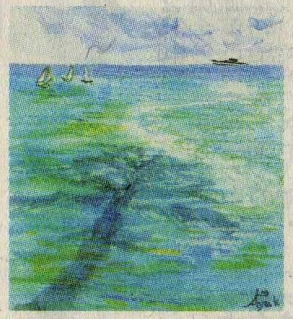
生まれは大阪の工業地帯のど真ん中。幼少期は身体が弱く、母の背中におぶわれて毎月病院のお世話になっていた。細く、小さく、どちらかというとおとなしいほうで、いまの自分からは想像できないくらいだ。

父が転勤族だったこともあり、見知らぬ土地に抵抗感は薄く、「それなり」の営業マン生活を送った。数年後に転勤で仙台へ。ここで出会ったある劇団が、私の人生を転換させることになる。

知的に障がいのある人が演じる劇団の来日公演で、勤務する会社が後援することになりボランティアを募集した。私は真っ先に手を上げて参加！ もちろん「公式に会社を休める」という実に不純な動機である。

会場には、重度の障がいのある子供たちも来たのだが、介助の方から「私たちならチケットさえ買えば今日にでも来られるこの場所に、この子たちは何カ月も前から準備しなければならないのですよ」と言われた。

トイレ、フロア間の移動や会場へのアクセス、介助の人員配置など、よく考えてみると周りは「壁」だらけだ。自分のすぐ隣に「普通にできて当たり前のことができない人がたくさんいる」という現実に愕然（がくぜん）とした。「自分も何かしたい！」と心が叫んだことをよく覚えている。



その後、1年もしない間に湯沢町で障がいのある人の参加も含めたアウトドアの仕事をするようになった。関西圏からはアクセスの関係で、北海道よりも縁遠いといえるかもしれない新潟という土地。でも、この地に来て、私の人生はとても充実したものになった。

稲治 大介（NPO法人理事長・湯沢町）